

告白

ヤマダヒフミ

目次

微風	・ 2
悪夢	・ 3
詩人のキス	・ 4
詩人の言葉	・ 5
宇宙を通過	・ 6
ある論文の主題	・ 7
黒い卵	・ 8
世界が終わり	・ 9
感動を止めさせることはできない	・ 10
あの時のネロへ	・ 11
声	・ 12
扼殺	・ 13
死体をくれ	・ 14
W・H・オーデンに	・ 15
天使の存在	・ 16
告白	・ 17
詩人の仕事	・ 18
小鳥が道に墮ちた時	・ 19
流星の光	・ 20
君は駄目	・ 21
魂の神殿	・ 22
生命が死ねば	・ 23
仮面の下の心	・ 24
真実の復讐	・ 25
道化の還り道	・ 26
過去と今と未来	・ 27
陽	・ 28
刺客	・ 29
問い—答え	・ 30

微風

一編の音楽が世界を奏でている時

僕は一体、何を歌おうか？

世界が一つの交響曲である夜

僕は一体、何を叫ぼうか？

人々が一つの怨歌である今

僕は一体、何を怒鳴ろうか？

．．．．．わからない

．．．．．わからない

それでも僕はここにいて

その頬に穏やかに微風は吹き付けるのだ

悪夢

朝、君は透明な線をなぞり
この世の外に出る
そこには丘が一つあって
そのてっぺんには樹が一本立っている
そしてその樹の下には若年の頃の君が眠り
"君"が近づくとうっすらと眼を開けて
「おはよう」と微笑む
その時、君はつと夢から覚めて
ああ、二度ともうあんな悪夢は見たくない、と呟く
彼女は君を殺そうとしていたのだ
現実の——大人になった君を呪って

詩人のキス

「詩人はキスをする時
目をつぶるの?」
という質問が子供から来ました
詩人はキスをする時
目を開けています
何故なら詩人は
見えない物を見るのが仕事
だからせめてキスの時だけは
相手の事を見つめようとするのです

詩人の言葉

詩人の言葉は

普通の人話す言葉とは違う

別段、高尚という訳でもないがとりわけ卑俗でもない

それは例えば恋人の裸体にそっと伸ばす手や

太陽を求めて延びる蔦によく似ている

何かを求めるから その先に

言葉がやってくるのだ

宇宙をって

世界は塵

・・・今日の雪のような

僕は傘を差す

君をって

傘の上には雪

雪の上には雲

そして雲の上には空が

空の上には宇宙が・・・ある

君は僕に会いに

電車に乗ってやってくる

僕には分からない

どこか遠くの宇宙をって

ある論文の主題

心を越えて

空は有る。

魂ほどの大きさの

宇宙の容量についての論文。

光。

夜。

今、君が見せた裸体について――。

言葉を失うことについて。

誰もが知っていることを「知らない」というおじさんの凄惨な死について。

誰もものありふれている死について。

誰もが忘れていく死について。

自分の死について。

自分について。

君のことについて。

黒い卵

黒い卵を俺にくれ
できれば真っ黒な奴がいい
昔、ローリングストーンズというバンドに
「黒く塗れ!」という曲があったな
そう、そんな具合に
俺の手にも真っ黒な卵をくれ
俺はそいつをこの聴衆のただ中で叩き割って
真っ赤な血を吹き出させてやるから

世界が終わり

世界が終わり

一本の樹に

実が成る

世界が終わり

一对の男女は

互いに睦言を捧ぐ

世界が終わり

僕はたった一本残された樹の下で

たった一冊残された本を

気楽に読む

感動を止めさせることはできない

感動を止めさせる事はできない
いかに美学者や歴史学者が口酸っぱく
その作品について力説したところで
感動を止めさせる事はできない
為政者がピストルを突きつけて
「それを止めろ」と言ったところで
感動を止めさせる事はできない

万人が涙を流し

「素晴らしい」と言った所で

それがフェイクである限り

俺は笑いもせず泣きもしない

感動を止めさせる事はできない

ふいに訪れた昔の音楽や

恋人の切ない表情や風に吹かれた一輪の花なんかに

つつい感情移入してしまう事を

お前達は決して止めさせる事はできない

感動を止めさせる事はできない

俺の心は石でできていない

俺の心は心臓でできているのだから

あの時のネロへ

雨に濡れ

ネロは行く

自らの死骸を引きずって

彼は昔に死んだ

その時に彼には

彼の死を詠んだ一人の詩人がいた

今はもういない

ネロは行く

自身の死そのものを

廃棄場に捨てに行くために

声

死者の嘆きが聞こえる
誰にも殺される事のなかった
死者の嘆きが俺の魂の耳に聞こえる
言葉を失って
生と死を剥奪された
現代人の死体の呻きが
俺の耳に今はっきりと聞こえる

扼殺

生ある者を全て扼殺せよ

それらは全て幻影であり幸福の余韻に過ぎない
彼らはあたかも生きているかのように見せかける架空の生き物であり
一匹ののろまな亀の存在感にすら及ばないのだ

生ある者を全て扼殺せよ

我々は死者だから 死者として生きているから
枯れた一枚の草ほどに我々は
死を謳歌する事すら許されていない

生ある者を全て扼殺せよ

全ての原因菌は幸福という幻想の中にあり
生きているというまがい物の存在感の中にある
架空の中に生を創造せよ 我々は
そこでのみ生きる事ができるのだから

死体をくれ

死体をくれ

俺に一体の死体を

何故なら、生きている奴はどこにもいないから

生きている奴がいないから死体もまたあるはずもなく

この秋の驟雨の中で鳴っている音は一体、誰のためのものなのか？

そんな問いを発する俺もまた生者でも死者でもない

俺に死体をくれ

一体の渴いた死体を

今にも土に還りそうな

真に生きる事の意味を知っていた

そうした一体の死体をおくれ

W・H・オーデンに

『役人が机を叩いて叫んだ
「お前達はパスポートがなければ死んでも同然だ」
だけど俺達はまだ生きている そう、生きているんだ』

これが僕達、詩人というものだ
土くれ一つ持たないけど
血の一滴だけは所有している

※オーデン「亡命者のブルース」より

天使の存在

考えに考え抜かれた策略が
愚か者の一言で崩壊する時
そんな時に人の上に天使は舞い降りる
きっと、天使は笑って僕達にこう言っているのだ
「私達の真似をしてはならない あなた達はあなた達自身でいなさい
その時、初めて私の存在を感じ取れるでしょう」と

告白

好きな女の子や男の子を見ると
胸の鼓動が高まり感情を知らせる
科学雑誌には心臓の機能は事細かく載っているものの
この私の気持ちについては載っていない
それでも人は「ノー」と言うから
私は彼に好きだって伝えてやる
この胸の鼓動を彼にあげる

詩人の仕事

美しいものに光を与えて
俺は詩人となった
世界とはうずたかく積まれた
瓦礫の山
なら建築家はそれを拾い集めて
"塔"を作るだろう
今、俺は亡骸共を集めて
自らの生の記念碑を織る
神様に似せて作られた
人間共の像を壊してから

小鳥が道に墮ちた時

少女が死んだ時

お前達は無視しただらう？

俺が自殺した時

お前達は嘲っただらう？

・・・そして家に帰ってテレビかパソコンの前で
急に憤ったり正義の心を発奮させたのだらう？

そして今日、小鳥が道に墮ちた時

お前達は小鳥の死骸を踏みにじりつつ

どこか前方を見ながら歩いていったのだらう？

流星の光

生を強制され
死を禁じられ
予め決まったコースを
粛々と進む
それが正しい事なのだと教わって
僕らはここまで来た
なら、今、僕の目に映る
あの流星の光は何なのだろうか？
人間の意想の圏層を突き破って飛ぶ
あの重さ 1 tの石塊は

君は駄目

君は駄目だろう
どうしようもないだろうね
君は使い物にならない
君は人間じゃないから

・・・この世にはどこか健康で幸福な市民というものが仮定されていて
そこから一ミリでも外れたらまともに生きることはできない そんな世だから

君は駄目だろうね
どうしようもないだろうね
僕と一緒に
僕も駄目なんだ

魂の神殿で

そこで出会い
我が身を語れ
世界を支配して
笑う者も
愛に傷つき
泣く者も
そこで互いに語り合い
己が身を軽くしよう
そして、己を持たぬ者達は
門外で順番を待て
刻々と流れていく時の流砂で
我が身を擦り減らしつつ

生命が死ねば

生命が死ねば

そこに別の生命が入り込む

人が死んで遺体となれば

そこに細菌や虫が湧くように

この自然の中で

死んでいるものなど何一つない

あの広大な死の空間——宇宙から

結局、我々が生まれたのだと納得できさえすれば

死んでいるものは人の脳の中で

物質として名付けられた無味乾燥のものだけ

全てが無機物のような粒子で構成されていようと

今日も芋虫は蔦を這う

仮面の下の心

知っているか 心には本文があることを
もし君が嘘ばかりついていたら
君は自分でその嘘を信じて
君の顔は仮面そっくりとなって死ぬ
その君の死の時、ようやく仮面はゆっくりと剥がれ落ち
自然は自己を取り戻す
この交差点の真ん中で今、僕は立ち止まり
人々のそれぞれつけた仮面を見て何を思うのか・・・？
僕のつけた仮面が人よりわずかに分厚い事を僕は願う
そうすれば人々に僕の仮面が嘘だと見破られずに済むから
誰よりも本音を吐露しようと追い求め続けた心を
人々の前に晒さなくて済むから

真実の復讐

偽りの希望を語れば
人々が誉め讃えるのは
何故だろうか？
・・・それは人々が常に
藁をも掴む心境にいるからさ
人々は時々、藁を鋼鉄製の船と見間違えるために
そんな魔術師を必要とするのさ
ではもし真実の絶望を
真実は人々に近寄り難い代物であるという事を語ったら
どうなるのだ？
・・・そいつは磔にされて
人々の夢を破った罰で処罰されるのさ
・・・そうして真実に復讐されるのは
大勢の皆さんの方だけどな

道化の還り道

人々が真剣になる時
俺は最もふざけた格好をして出て行って
人々を一つ、クスリと笑わせてやろう
人々は俺を見てゲラゲラ笑い
「道化、これをくれてやる」と言いながら
俺に十円玉を投げしてくれるが
俺はその還り道、川のほとりで
その十円玉を川面に向かって投げる
それは「ポチャン」と切ない音をして
ゆっくりと川底に沈んでゆく
それは俺自身の姿でもあり
人々の姿でもある
そして俺は赤子のように目を腫らして
泣きながら家に還るのだ

過去と今と未来

過去も未来も

幻想に過ぎぬ

人々の一瞬明滅する脳内に浮かんだ

空の空に過ぎぬ

過去を捨て、未来を捨て

そして「今」が自分だと気付いた時

全ては作られたものだと悟った時

お前は一つの礎となって、歩き出す

その時、お前はようやくこの今の瞬間と重ね合わされ

そうしてお前の来た道には過去が

そしてお前のやがて行く道には未来が

一本の線として引かれるのだろう

陽

俺達の空虚が体現された

芸能人やアイドルといった存在

俺達は常に干からびて、喉が渴いているが
それを満たしてくれるものが何かは知らない
人々は幻影を見るために努力し続けてきたが
俺は一人真実を見るために努力してきた
今、俺の見る真実がどれほど醜かろうと
人々の美しい幻想のそれよりは少しばかり
本物の金の味がすると思いたい・・・

今日もまた似たような陽が昇る

人々の美しい幻想の色と俺の真実の色が互いに混ざり合った
真っ赤な色をした陽が

刺客

言葉の沃野で

俺は途方にくれる

俺は詩人だ

ただ、自分一人でそう認めているだけの

もし君が世界に認められたいなら

そのノウハウはどの書店にも置いてある

ただ、そうする事は僅かに

人生の浪費であるかもしれないだけだ

君は目を失って 始めて

物が見えるようになるだろう

そして僕の言葉が遠い残響の内はまだ

君は僕を殺しにくる刺客なのだろう

問い—答え

死とは何か？
世界を魅惑するもの
世界を覆うもの
生とは何か？
世界そのもの
世界の前進そのもの
詩人とは何か？
その間にあって
歌を歌うもの
ヒバリのように 一輪の花のように
この世の呪いに抗して
花を咲かせるもの
君とは何か？
この歌を聞いて黙って耐えている
君とは何か？
君とはつぼみ
今、芽の状態にあって
開花を待つ永遠の十代
そして
僕とは何か？
僕とは一体何か？
問いそのもの
世界への問い、そして
答えでもあるもの